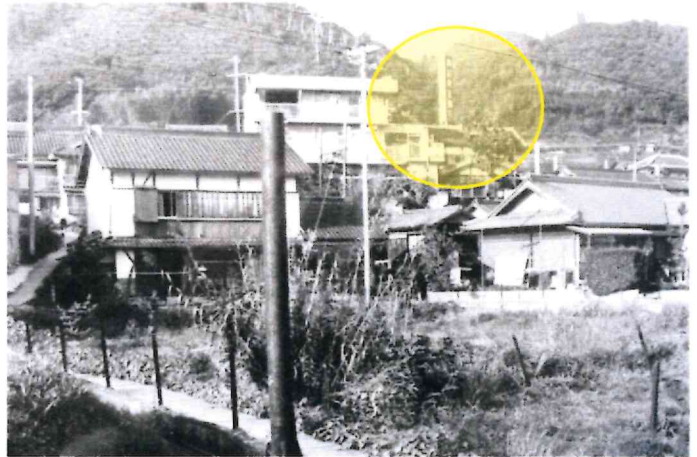


「紀州製糸工場と野上座」

いま 今から 171 年前、ペリーが 4 隻の 軍艦を率いて浦賀に現れ、開国をせまりました。開国によって諸外国との自由貿易が始まり、日本からは生糸や茶などが大量に輸出されました。開国当初は主にヨーロッパ向けに輸出されましたが、その後、アメリカ向けの輸出が中心となります。明治 5 年には富岡製糸場が完成し、政府が自指した殖産興業政策に大きく寄与しました。富岡製糸場の設立には、新しい 1 万円札の肖像に描かれた渋沢栄一氏が大きく関わっています。そのため、製糸業と言えば、富岡製糸場のある群馬県や「ああ野麦峠」で知られる岐阜県や長野県など、中部・関東地方のイメージが強く残っていますが、わが町にも製糸業が盛んだったところがありました。養蚕業の最盛期を迎えた大正 3 年、東野上村勤木に資本金 30 万円で「紀州製糸会社」が設立されています。製糸工場は小畑にあり、乾繭場は 100m ほど離れた場所（興紀相互銀行の敷地跡）に設けられていました。野上谷で生産する繭はほとんどここで生糸に製造され、生糸の生産量は 3,200 貫にのぼりました。規模については正確な記録はありませんが、釜数は 150 であったことから女工賃が 150 名いたと想像できます。女工員の多くは、野上谷や奥有田の出身者がほとんどであったといえます。紀州製糸会社は大正 12 年まで経営、その後、新しい製糸会社に引き継がれました。わが国の製糸業は、明治・大正・昭和初期まで輸出の主座を占めていましたが、人造絹糸に続いてナイロンの出現により大打撃を受け、この製糸会社も昭和初期に操業を停止し、工場を閉鎖することになります。製糸工場のはなやかな時期はわずか 20 年足らずでしたが、工場の存在は地域発展に大きく寄与し、その跡地に「野上劇場」（野上座）が設立されました。野上座は昭和 30 年ごろまで続きました。『野上町誌』より。

野上座は、大正 13 年設立という説があります。昭和初期に閉鎖されたのは製糸工場で、それよりも早い大正末期に閉鎖されたのは乾繭場だったのかもしれませんが。

（令和 6 年 7 月 4 日）



昭和 60 年ごろ 写真奥に
興紀相互銀行の看板が見えます。